九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ボリス・ヴィアンの言葉遊び

前川, 完
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9933

出版情報：Stella. 10, pp.71-95, 1991-10-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ボリス・ヴィアンの言葉遊び[1)]

前　川　　完

エクリチュールの逸脱したかたちで，ラブレーは『パンタグリュエル物語・第五の書』の巻末に「徳利明神」の詩を書いた[2)]。宗教的韻文を十字架や聖体器の型に組み上げた中世のテクストの形式を世俗化したこの詩は，徳利の絵の輪郭にかこまれた空白の胴体部分に詩行を分断することで，物語に登場する祈禱書型の酒徳利を視覚的に説明する挿入図としての性格をもっている。また，アポリネールはカリグラムという手法で，行を無視した大小さまざまな文字の配列によって詩を1枚の絵画になぞらえた。いずれも記述の内容を形象化し，エクリチュール自体をより視覚化する。また，古代ラテンの魔方陣や世界のいろいろな国の民衆的な看板に見られる判じ絵もいわばグラフィック遊戯であり，広い意味での言葉遊びの範疇にはいるのである。

これらの例は，言葉というよりも文字・活字についての遊びであり，語彙論よりは記述法にかんするもので，直接視覚にうったえる絵画の資質をももちあわせている。一方，より狭義の言葉遊び，すなわち「音声の類似から生ずるあいまいさを利用する遊び」を絵画的な文字遊戯とは区別して考えるならば，この意味での言葉遊びを多用する作家には，ジャリやクノー，プレヴェール，ルーセルらがいる。彼らのテクストにあふれる地口や擬音語，奇妙な造語の背景には，発話される「音声」にたいする問題意識の強さがうかがえる。

さらにつけ加えるならば，シュルレアリストの「妙なる死体（cadavres exquis)」や「もし……するとき（si…quand)」など，いわゆる「紙きれ遊び（jeu des petits papiers)」とよばれる集団遊戯[3)]や，ブルトンとスーポーの自動記述といった方法が想起されるだろう。このふたつの方法はどちらも過度に偶発的であり，人間の作為をこえた無意識に依存しているという点で，他の言葉遊びとははっきりと一線を画する特異の遊戯である。

以上のように，文学史上見られる言葉遊びの例として3つの類型をあげてみたが，これらはもちろんごく一部のモデルにすぎない。ピエール・ギローは，

前出の地口やカリグラムにくわえて，異義復言・もじり・すりかえ語・字なぞ・列挙・連結・回文・逆さ言葉など多岐にわたる分類をおこなっているが[4]，文体模写やコラージュ・デクパージュ・パロディーなどはそこからは洩れている。実際のところ言葉遊びと呼ばれるものは多種多様であり，完璧な分類はきわめて困難である。これは，本来隠語や俗語などの仲間内だけのコードにもとづく，いわば暗号的な要素をもち，一方では純粋に笑いを誘うことを目的とした無償の遊戯であることから，言葉遊びが不真面目な，とるに足らないものとして軽侮されてきたという事実にも起因しているだろう。

とはいえ，言葉遊びはことわざや慣用句におとらない言葉のエッセンスであると考えられる。また，言葉遊びを論じるにあたってはその文学的な機能よりもむしろ，それに先行する作者の精神の柔軟さや，それが人間と文学にたいする態度表明でありうるかという問題こそが重要だと思われる。無償の遊戯たる言葉遊びを駆使して，徹底して「無益」であることに価値を与えようとする作家精神とはなにか。「以下に挙げる論拠の最大の長所はそれが全部本当にあった話だという点だ。というのも，それはわたしが初めから終わりまででっちあげた物語だから」[5] というヴィアンのパラドクスに感じられる，潔いまでの反逆精神はどこからくるのか。そして，言葉遊びそのものがかりに「無益」なものであるにせよ，なぜわれわれはそれがつくりだすイメージに惹かれるのか。以上のような問題意識にたって，本稿では言葉遊びの面からボリス・ヴィアンの言語感覚の考察を試みる。

I．言葉のあいまいさ

まず最初に，予備的な作業として「言葉遊び」について代表的な仏語辞書がどのような定義をしているかを述べておく必要があるだろう（下線の強調は引用者による）。ロベール辞典によると「言葉遊び」とは「音声は似ているが，意味はきわだった対照をなす言葉のあいまいさにもとづく面白いほのめかし」をしめす。リトレ辞典では「言葉の音の類似が濫用されているすべての文章に対する総称」である。ラルース辞典は「言葉の類音性，同音性のうえになりたつ掛け言葉」としている。つまり言葉遊びの根底にあるのは，«fin/faim» のような同音語，あるいは «suisse/cuisse» のような類音語など，非常に似かよった音をもつ言葉の，それぞれが意味するものの違いを逆手にとった遊びの精神であるといえる。

ところで「あいまいさ」とは，「二重の意味をしめしているもののすべての欠陥」である。ほとんどの言葉（固有名詞でさえも）が多義性を帯びているのであるから，この欠陥は言語がその発生時から内在する問題であろう。極端な例をあげれば，«hôte» は「主人」と「客人」，«louer» は「借りる」と「貸す」というそれぞれ対立する意味で同時につかわれ，«voler» は「盗む」と「飛翔する」というかけ離れた観念をあわせもつ。しかし「あいまい」であること，すなわち二重の意味をもつことが言語の最大の効用であり，言葉の多義性なくしては文学は存在しえないともいえよう。もしひとつの言葉にはひとつの固有の意味しか対応しなかったとすれば，言語体系はおそろしく貧弱なものになるか，人間は無数の観念と事象に名づけられた無数の言葉にたいして，辞書の編纂という仕事を永遠に終えることはできないかのいずれかだろう。「あいまい」であることが語彙上や統辞法上の不完全さをまねくとすれば，それが言語の本質なのである。それゆえすべての比喩表現や曲言法，韻文などをつくりだすこの「あいまいさ」は，文学言語のもつ文彩の源泉であるとみとめられる。しかし故意に「面白く」「濫用」されたとき，言葉に内在するこの修辞学的機能は一瞬にして効用を失い，言葉遊びを多分に駆使した作品は文学としての価値を剝奪される危険性をはらんでいる。本来，その基盤を同じくしていながら，一方では，文学の文法ともいえる修辞学は遊戯にのめり込むせとぎわでもがき苦しみ，他方では，修辞法の異端児ともいえる言葉遊びは，あたかも人間が相互理解のための堅実な手段とでも誤解している言語体系の規律から大きく逸脱し，その不確実性を露呈せんとくわだてている。

言葉遊びはたしかにどの時代の文学作品のなかにも潜在する。15 世紀の大押韻派たちは第二修辞学の名のもとにかずかずの押韻法をあみだし，掛け言葉の辞書を編じてひたすら押韻の訓練にいそしんだ。現代にいたっては言葉遊びのスペシャリストとでもいうべき「潜在文学工房」の面々が新しい文学の方法を模索している[6)]。

それでは，ヴィアンはどうか。彼の小説を読むとき，数十の章に分断されたその文体が異常な速度をもつにもかかわらず，われわれはテクスト上に唐突にあらわれた，聞き慣れない異質の言葉によって読みつづける作業を停止させられてしまう。故意に「面白く」「濫用」された文彩が言葉遊びに墮ちるのならば，ヴィアンの作品にはほとんどどのページにも言葉遊びがみとめられるといっても過言ではない。

II. ヴィアン作品におけるいくつかの言葉遊び

ほとんどの言葉遊びが慣用的な言いまわしやことわざ，凝結したかたちでの成句を変形させたものである以上，また，言葉遊びの本質をなすものが掛け言葉であり，音声の類似を利用するものであるという規則に基づいている以上，翻訳されたヴィアン作品が，フランス語を母国語としない読者に理解されにくいのは避けがたい事実である。「遊ばれるもの」として当然念頭においておくべき慣用句や成句，そこにつかわれている語がもっている音声の類似のおもしろさをなくしては，言葉遊びは単に突飛なイメージのぶつかりあいに陥り，読者にとっては訳のわからない記述に終わってしまうだろう。たとえば，つぎのような翻訳文を読者はどう読むことができるだろうか。

> 彼はつまらない今日一日の終わりを一緒に過ごすはずになっているキュブランを待っていた。この起伏という観念から，彼はズボンがきちんとおちついているかどうか手で確かめた。いつものように，それはきっと精神病医のシッポで終わっているだろう。[AC 116]

この文章からは3つの言葉遊びを指摘できる。第一に，「つまらない一日（un jour sans relief)」という慣用表現と，「起伏の観念（idée de relief)」つまり，みだらな想像に興奮して盛り上がったズボンの前部を意味する比喩的な表現，翻訳文では関連性のうすいこの2つの表現をつなぐ単語が «relief» であること，第二に「キュブラン（Culblanc)」という女の名前がもっているあきらかに性的なイメージ，そして第三には，「精神病医のシッポで終わる（terminer en queue de psychiatre)」という，一読では理解不可能な言いまわしの原形が「惨めに終わる（finir en queue de poisson)」にあること，である。つまり，この数行を読むためにはすくなくともこれだけの予備知識が要求されるのである。

デュシャトーがヴィアンの小説を「仕掛け小説」[7] と呼ぶように，われわれはそこにしかけられた罠を見過ごして，ヴィアンの幻想世界の迷宮で出口を見失うことになるかもしれない。それもたしかに読み方のひとつではあろう。しかし，モノのように加工されたヴィアン言語をすこしでも解明するために，本稿ではヴィアンの言語操作をいくつかの特徴的なカテゴリーにわけて分析を試みよう[8]。

1．俗語的表現・英語からの借用語

俗語・隠語・卑語などは，文章を彩り精錬を重ねられる文学言語に逆行する，言語の実践においていわば底流をなすものである。それは時代を反映する民衆の言葉でもある。この分野の莫大な語彙ではいまだラブレーをこえる作家はみあたらないが，セリーヌやクノーは「話し言葉」を導入することで「書き言葉」の限界を示した。俗語や隠語それ自体は言葉遊びと呼ぶにはふさわしくないが，ヴィアンにとっては「話し言葉」をそのまま口述筆記することが，言葉遊びの前段階として許されるのである。

つぎの文章には俗語にくわえて，後に述べるヴィアン独特の造語機能がはたらいているが，同一文のなかに，同じ形と同じリズムで主要概念を敷衍する多数の細部を寄せ集めた「積み重ね」の手法を三重にわたって駆使している。すなわち，現在分詞節の積み重ねの大きな流れのなかで，さらに（ダンスの様式を連想させる）副詞句を列挙し，そして世界各地の罵倒語へと遊戯は続くのである。

> Des couples dégouttants de sueur parcouraient des kilomètres au pas de course, se prenant, se lâchant, se projetant, se rattrapant, se pivotant, se dépivotant, jouant à la sauterelle, au canard, à la girafe, à la punaise, à la gerboise, au rat d'égoût, au touche-moi-là, au tiens-bien-ça, au pousse-ton-pied, au lève-ton-train, au grouille-tes-jambes, au viens-plus-près, au va-plus-loin, lâchant des jurons anglais, américains, nègres, hottentots, hot-ce-matin, bulgares, patagons, terrafuégiens, et kohêtera. [VP 181]

「ダンスパーティー（sauterie）」は「キリギリス（sauterelle）」にとってかわり，「ホッテントット（hottentots）」は「オスマントルコ（osmanlie）」を介して「今朝は暑いね（hot-ce-matin）」をみちびき，「フエゴ諸島（terre de Feu）」は「抗生物質（terrafungine）」と合成されている。そして最後には神学用語の「ともに永遠の（coéternel）」という形容詞から«kohêter»なる動詞をつくりあげる。つぎつぎにあふれかえる言葉の連鎖は，まるで言葉それ自体がつぎに続く語句をみちびき，文体を決定するのは作者ではなく言葉そのものであるかのような印象すら読者に抱かせるのである。

1950年代にラルース小百科が採取した新語4000語のうち2.5%が英・米起源の外来語である[9]。つまり10年間に約100の新語が英米語から借用されたことになる。これはもちろん，外国から導入した新しい事象や観念の定着とい

う社会的な背景ぬきには語れない。セリ・ノワールの翻訳家としても知られるとおり英語には堪能だったヴィアンは，特にアメリカからはいってきた風俗に敏感である。また『墓に唾をかけろ』*J'irai cracher sur vos tombes* の性描写で風俗壊乱の有罪判決をうけた裁判では，アメリカの黒人作家ヴァーノン・サリヴァンの原作と偽って，英語版 *I shall spit on your graves* まで出版している。ジャズ批評家・演奏家でもあるヴィアンの作品中にはジャズ用語も数多い。これらの側面を念頭におくと，ヴィアンの作品に外来語（特に米語）が頻出するのも当然であろう。なかでも純粋な外来語ではなく，表記の面で変形された，特に奇妙なものをあげてみると，

・«avant leur tétée de troizocloques» [AC 84] ——「3時のおっぱいの前に」という意味だが，«trois heures justes» というべきを英語ふうに変形している。日本語でも特定の時刻が転じて「おやつ」というように，このような言いまわしは辞書にはなくとも，現在つかわれているのかもしれない。

・«Don Evany Marqué, le joueur de baise-bol célèbre» [EJ 156] ——もちろん baseball の音声表記であるが，«baiser» には「性交する」，«bol» には「尻」の俗意があることからホモセクシュアルをほのめかしているとも受けとれる。そして «Don Evany Marqué» が Raymond Queneau のアナグラムとなれば，この一文が親しいクノーへの，やや度が過ぎた冗談なのか，それとも公然の（célèbre）秘密なのか判断しかねるのである[10]。

2.1. もじり

もじりは「遊ぶもの」と「遊ばれるもの」の関係上，種類の次元で首尾一貫しておらず，同音性が不完全で，統辞法が守られていない言葉遊びである。よって無償の遊戯たる言葉遊びのなかでもっとも恣意的な，言語学的基盤をもたないものといえる[11]。

・«Isis Ponteauzanne» [EJ 23] ——«pont aux ânes» との同音性から「誰にでも解けるやさしい問題」を想起するのは簡単だが，あるいはこの女性の，コランとクロエをめぐり逢わせる懸け橋としての役割から «pont aux âmes» のもじりであるとも考えられる[12]。

・«le Serment sur la Montagne de la baronne Orczy» [EJ 76] ——聖書中マタイ伝第5－7章に記された「山上の垂訓（Sermon sur la Montagne)」が原形であることはあきらかだが，「オルツィー男爵夫人」がなんらかのかたちでボシュエを指すのであれば『死についての説教（Sermon sur la mort)』

をもじったと考えなければならない。

• «en proie aux cent treize douleurs de l'enfantement» [AC 11] ——15世紀初頭の短編物語『結婚の15の愉しみ（les Quinze joies de mariage)』をもじって「分娩の113の苦しみ」としている。フローベールの『紋切型辞典』には，「お産（accouchement)；避くべき言葉，おめでた（évènement）というべし」[13] とあるが，«accouchement» を古い言い方の «enfantement» に置き換えているため，中世のテクストらしさと「文学的創作の苦悩」というニュアンスを同時にもちあわせている。

ヴィアンは5歳で読み書きをおぼえ，8歳にはモーパッサンまでのフランス文学をすべて読破していたという[14]。ヴィアンの小説のなかでは，古典から現代までの文学作品が数多く，かたちを変えてほのめかされているが，『日々の泡』におけるサルトル作品へのオマージュとも諷刺ともとれる暗示は群を抜いている。『嘔吐』にかんするものだけでも以下のとおりである。

• «Paradoxe sur le Dégueulis»「吐きものに関する逆説」[EJ 35]
• «Choix Préalable avant le Haut-le-Cœur»「むかつきの前の前提選択」[EJ 38]
• «Le Vomi»「吐瀉物」[EJ 47]
• «Le Remugle»「かび臭さ」[EJ 57]
• «Renvoi de Fleurs»「花のげっぷ」[EJ 99]
• «Encyclopédie de la Nausée»「嘔吐の百科事典」[EJ 117]

そしてこれらはそれぞれ「赤いモロッコ革で装幀された初版本」，「ぎざぎざのはいってないトイレットペーパーに印刷」，「半分をスカンクの革で装幀」，「ボヴァール公爵夫人の紋章入り」，「キエルケゴールの序文つき」，「全20巻で写真多数」であるためたいへん高価で，収集家シックは税金を滞納して警察に射殺される。

2．2．教会と軍隊にかんするもじり

もじりを含む文章では論理的な意味は欠落ししばしば統辞法すら存在しない。遊戯としての無償性がもっともつよいこの言葉遊びを前にしたとき，「言葉は空転し，われわれは言語錯乱のまっただ中で，壊れた仕掛けの精神錯乱的反応」[15] をしめす危険に陥るのである。このような作為的な言語壊乱の多くが特に生涯一貫して嫌悪しつづけた教会と軍隊にむけられており，読者はそこにヴィアンの執拗な攻撃を読みとるのである。

Le Religieux sortit de la sacristoche, suivi d'un Bedon et d'un Chuiche. [...] parce que le Chevêche vient pour la Béniction. [EJ 52]

• «Chuiche»——「教会の制服警護員，聖堂番（suisse)」を，オーヴェルニュ地方のなまりを利用して皮肉っている。«Chuiche» は「けちな，しみったれた」という意味の chiche と類音性があり，また ch–の語幹は，「ひそひそささやく，ざわめく（chuchoter)」，「野次を飛ばす（chahuter)」，「虚勢を張る（chiquer)」，「あざ笑う（chiner)」，「高慢にふるまう（chochoter)」など，多くの悪い意味をもった俗語をつくりだすことから，フランス語のなかでもやや不快に聞こえる音であるのかもしれない。
• «Chevêche»——「司教（évêque)」のもじりであり，この綴りだと権威ある聖職者が獰猛な「コキンメフクロウ」と同一視されてしまう。
• «sacristoche»——「香部屋（sacristie)」の意味でつかわれている。ここでもやはり ch–の音が付加されているが，«sacristi» は「香部屋」という聖職の用語と完全に同音でありながら，「ちぇっ，なんてこった」という怒り，いらだちをあらわす間投詞である。
• «Bedon»——「教会の用務員，助手（bedeau)」というかわりにもちいられており，«bedon» には「太鼓腹」の俗意がある。«Chuiche» と «Bedon» の２人は作品中で，ヴィアンが嫌悪し嘲笑した教会の，さらにその下働きというもっとも無能で偽善的な役割を演じる。聖堂番にはじつは名前があるのだが，«Presque tous les Chuiches professionnels s'appellent Joseph, en effet» [EJ 52] とあるように，人間としての個性は失われ，職業，制服が中身を決定するモノ化へのおそろしさが見てとれる。

名前を失うという「没個性化」は警察・軍隊にたいしても施されている。

— Douglas ! appela le sénéchal.
— Présent ! répondit le premier agent d'armes.
— Douglas ! répéta le sénéchal.
— Présent ! dit le second.
L'appel se poursuivit. Le sénéchal de la police ne pouvait se souvenir du nom de tous ses hommes et Douglas était un générique traditionnel. [EJ 154 – 155]

聖堂番がみなジョゼフという名前であるのと同じように，警官もまた全員ダグラスと呼ばれる。警官隊の隊長は時代がかった「代官，奉行（sénéchal)」と

おおげさに名のり，モノ化した非情な警官は「警官，手先（agent)」と「兵士（gens d'arme)」を結びつけた「武装官憲（agent d'arme)」と憎しみを込めて呼ばれるのである。

両親から「社会の三位一体である軍隊と教会と金銭を徹底的に軽蔑して，自由を愛すること」[16] を教えこまれて育ったという挿話は，ヴィアンのこのような言葉遊びを理解するうえで非常に興味深い。「軍隊と教会への軽蔑」は上記の例だけではなく実生活においても続行されているが[17]，「金銭（＝労働)」もまた人間のモノ化を促すという極論の根拠として，ヴィアンは攻撃して止まなかった。60年代の終りから，ヴィアンの作品は死後10年を経てようやく読まれはじめた。政治的な意見はまったくもちあわせていなかったにもかかわらず，革命前夜の政治意識にあふれた当時の若者に支持された理由は，じつはヴィアンの無責任さ，つまりこの（額に汗して食いつなげなければならない）「労働への厭悪」にあったのではないだろうか。作品中でもヴィアンの労働観は登場人物の言葉を借りてあきらかにされている。

「働くのは嫌なんですか」と古道具屋はいった。
「恐ろしいくらいですよ。労働は人間を機械並みにしてしまいますからね」[EJ 126]

道徳の見地からすれば，自分の存在を認めてもらうためにも税金は払うべきだ。なぜならみんな税金を払っており，それが警察や高級官吏を養うのに役立っているからだ。しかし，これこそ悪循環というものだ。誰も税金を払わなければ，官吏はみんな食えずに死んでしまい，戦争もなくなるだろうに。[EJ 153]

ジャックモールは夢でも見ているかのように打ち続けている小僧をながめた。終りのない労働に釘づけにされたあわれな自動機械だ。
「手作りの方が安いよ」と，指物師がいった。「だって機械は高くつくからな，それにひきかえここにいるような糞みたいな奴はいくらだっているからな」[AC 41]

3．原義への回帰

ひとつの言葉がもつ多義性，すなわち固有の意味と比喩的な意味，具体的意味と抽象的意味，一般的な意味と特殊な意味の相違を利用する遊びである。言葉は往々にして単数の「原義」から複数に枝分れし，そこから派生した「転義」はしだいに「原義」から離れて，上の対比でいえばどれも後者である比喩的，抽象的，特殊な意味あいをもちはじめる。ヴィアンはこのような言葉の流れを逆行し，言葉がもっている原始的な力を露顕させる。

Emmanuel avait tellement peigné la girafe, ce matin-là, que la pauvre bête en était morte. [VP 102]

暇をもてあましていたエマニュエルは「無駄な仕事をし」て退屈をしのいでいたが，あまりに「キリンの毛を梳き」すぎたためにこの哀れな動物は死んでしまい，辺り一面が抜け毛だらけになってしまう。

— Exécuter cette ordonance... suggéra Colin.
Le pharmacien saisit le papier, le plia en deux, en fit une bande longue et serrée et l'introduisit dans une petite guillotine de bureau. [EJ 96]

前の例と同様，ヴィアンの言葉遊びのなかでももっとも独特な「比喩的意味を封じて，言葉を文字どおりにつかう」言語操作を論じるとき，必ずといってよいほど引用されるのがこの例である。「(医者の処方どおりに薬を) 配合する」はずが，処方箋は「処刑」されてしまうのである。しかしこの場面でなされる薬屋の一連の動作は，もし「事務用のギロチン」のかわりに，たとえば仮に「机の引き出し」であったとしてもごく自然である。«saisir»，«plier»，«(en) faire serrée»，«introduire» を処刑前の動作として「捕らえ」，「服従させ」，「締めつけ」，そして断頭台に「突っ込む」と読むのは容易だが，それは同時に薬屋が処方箋を「把握し」，「折り畳み」，「子細に検討」したのち，引き出しに「しまい込む」とも読めよう。このように言葉のもつ多義性は一文中に二重三重にも仕掛けられている。

Une petite mare s'était formée sous sa fesse gauche [...].
— On vient de m'opérer de la cataracte, expliqua-t-il, mais il en reste encore un peu, alors elle coule comme ça de temps en temps. [VP 118]

«cataracte» の「滝，土砂降り」と「白内障」という2つのかけ離れた意味を同時につかっている。語源の異なるあまりにかけ離れた観念をあらわす語は，無益な混同を避けるために多項に分けて配列されている。しかしヴィアンにせよクノーにせよ，辞書編纂者の努力を逆手にとってこのような同綴語の区別を無視してしまうのである。

Il attaqua comme un fou sans laisser au curé le temps de souffler. C'était une grêle de coups qui pleuvait, si l'on peut dire qu'une pluie peut grêler. [AC 178]

農民たちの不満を解消するために，司祭は教会で香部屋係とのボクシングの試合を催す。司祭は「降り注ぐパンチのあられ」をくらうが，それは「もし雨があられ降るといえるのならば」というただし書きつきでのことである。

Vous dansez avec moi ? proposa-t-elle au Major, en lui coulant un regard à 1300 degrés. [VP 56]

「そっと目くばせする（couler un regard)」の «couler» には「(鋳型に）流し込む，鋳造する」の意味もあることから，女は熱く焼けた鉄のごとき情熱的な「1300度の視線」で少佐を誘う。

Il enveloppa le Major d'un regard venimeux que la monture d'ébonite de son pince-nez se corroda en trois endroits. La mine de crayon de Zizanie, par ricochet, cassa net. [VP 142]

「意地悪な視線（un regard venimeux)」は，「有毒，有害な視線」でもあり，よって鼻眼鏡のゴムの縁は腐食し，鉛筆の芯はもんどりうって折れてしまう。毒素を受けてまいってしまうのは無生物である眼鏡の「縁」と鉛筆の「芯」だが，«monture» には「(乗用の馬や駱駝などの）動物」，また «mine» には「(人の）顔色」という生物的原義があり，遊びによるイメージはより多様化する。

— Évidemment, dit antiquitaire. Écoutez, coupons la poire en deux : deux mille cinq cents doublezons.
— Allons, dit Colin, d'accord. Mais qu'est-ce qu'on va faire des deux moitiés de cette sacrée poire ? [EJ 128]

古道具屋での値段の交渉で「あいだを取ろう，妥協しよう」ともちかけられ，「それで，２つに割ったそのいまいましい梨はどうするんだい？」と，コランは皮肉をこめる。特に会話のなかで「言葉を原義に戻す」操作が働いたばあい，その会話は突拍子もないばかばかしさを呈し，もはや人間は言葉に支配されて意思を伝えあうことすらできない。しかし，このような「言葉の事故」はわれわれが日常的に経験する問題であり，そういった意味ではたいへん現実的な言葉遊びである。

われわれは日常的に「言葉の事故」に出あう。それはちょっとした言い違いであったり聞き違いであったりするのだが，このようなミスは言語生活におい

て無意識のうちに修正され，対話者はたがいに許しあおうと努力する。しかしヴィアンの作品中では，この「言葉の事故」が人間関係を決定することがある。『日々の泡』にはつぎのような場面がある。

— J'ai pas le droit d'emporter des fleurs ? demanda l'autre agressif.
— Mais si, mais si, dit Jacquemort. Il ajouta : Avec quoi les arroserez-vous ?
— Avec de l'eau, dit Angel. Et puis, vous savez, il pleut aussi, en mer. [AC 141]

妻の冷淡な仕打ちに嫌気がさして，アンジェルは粗末な船で航海に出る決心をする。「あんまり卑怯にならないように」水も食料もほとんど携帯せず，船体には故意に穴まで開けているが，花の鉢だけは積み込んでいる。ジャックモールの「どうやって花に水をやるのか」という質問に，アンジェルは「水で」と答える。«arroser» と «cultiver» の意味をとりちがえたかのようなこの会話はちぐはぐなものになってしまい，2人は互いに好意を抱きながらも最後まですれ違ったまま，罵りあって別れるのである。

Vous reviendrez encore me psy... choser, dit-elle la voix rauque. J'aime ça. Ça fait du bien. [AC 137]

ジャックモールはなぜ「精神分析する（psychanalyser）」というたびに村の女中たちが顔を真っ赤にするのか理解できなかったが，それは無教養な彼女たちが「精神分析」という言葉を知らなかったために，単純にその音声的な感覚から性行為を思い浮かべたからである（«psy-» がつくる «pschit»，«psit» には「プシュッという人の注意を引く音」，転じて「しゃれたこと，粋なこと」というような俗意があり，«choser» は簡単に «chose»，«chosette»「性愛，色事」を引き出す）。「対象の知的内容の総体を吸収すること」が精神分析だと考えていたジャックモールも，このような「言葉の事故」から次第に精神分析と性行為の区別すらつかなくなるのである。精神分析の対象をもとめてジャックモールはさまよい歩き，ついには黒猫に分析を施して[18]その知的総体をわがものにする。

— C'est pour vous, dit-elle. Pour vous seul. Une chatterie.
Elle souriait avec un peu de malice. Il regarda mieux.
— Mais... c'est du mou ! s'écria-t-il joyeusement. [AC 121]

猫的しぐさを身につけたジャックモールにとっての「ごちそう，おいしいもの」は文字どおりの «chatterie» であり，「肺臓料理」が皿に盛られる。これは «le mou est pour le chat»「自分のものは自分にもどってくる」ということわざが起原になっているのはあきらかである。

つぎに挙げる2つの例では，成句表現の暗黙のうちに約束された規則は破られ，語句のすり替えや，本来許されない成句構成の分解がなされている。たとえば多くの動詞成句が不完全なかたちでありながらそのまま機能し（demander pardon, rendre compte など），また「空色の瞳 «les yeux bleu ciel» はけっして «les yeux bleus du ciel» とはならない。このように，成句は語句や構成が不完全のまま「凝結」することによって言語体系に生き残り，保存されてきたのであるが，ヴィアンは言葉を分解し，再構築することによって独自の文体をつくりあげている。それは「言葉の自律性」に記述を委ねているようでもあり，したがってテクストを書いているのは作者ではなく，言葉そのものではないかとさえ思えるのである。読者はばらばらになった言葉の残骸を組み直して，「隠された言葉遊び」を解かなければならない。まず第1例——

J'ai pas volé depuis des mois, dit le sacristain, toutes les fois que j'essaie, le menuisier me flanque une charge de gros sel dans les fesses et me traite de volaille. [AC 238]

悪魔の化身であり，実際に羽根が生えている香部屋係はいう。「もう何ケ月も飛んでいませんよ，飛ぼうとするたびに指物師がわたしの尻に粗塩を浴びせかけて，鶏みたいにあつかうんです」。この文章は文脈から，「飛ぼうとするたびに指物師がわたしの邪魔をして，おせっかいを焼くんです」となるはずである。ここでまず「いらぬおせっかいを焼く」①«mettre son grain de sel» がみちびかれ，この成句がさらに転じて，②«mettre un grain de sel sur la queue d'un moineau»「（スズメのしっぽに塩の粒をおくような）ほとんど不可能なことをやる」[19] と変化する。ヴィアンは②の成句を基盤として語を置き換えたのではないかと推測できる。つまり，«mettre» を «flanquer une charge» に，«son grain de sel» を «gros sel» に，«sur la queue» を «dans les fesses» に，«volaille» を «moineau» に，である。以上のような操作をへて「わたしにいらぬおせっかいを焼いた」という文章は「尻に粗塩を浴びせて，鶏あつかいした」と読めるのである。ヴィアンの作品は多分に帰納的な解

読を必要とするが，これがまさに「仕掛け小説」と呼ばれる由縁であろう。

ついで第2例——

Elle osait à peine remuer. Elle prenait tout du bout des doigts. Et elle avait déjà cassé trois vases. [AC 71]

先刻ジャックモールと交わったばかりの女中キュブランは，欲望の充足感と疲労で「ほとんど身動きすらできない（à peine remuer)」ため，なんでも「指先でつまんで／用心して（du bout des doigts)」取り扱う。ここで問題になるのは接続詞の «et» である。この接続詞を，対立の「しかし，それでも」ととれば «du bout des doigts» は比喩的な「用心して，慎重に」の意味になるが，結果の「それで，だから」ととれば固有の意味の「指先でつまんで」となる。つまり，「(ほとんど身動きができないほど気持ちは上の空で，だからこそ）慎重に花瓶を扱う，それでも割ってしまう」と，「(動けないほどけだるい気分なので）何でも指先だけで済ませようとする，だから花瓶を壊す」の相反するふたつの文意をつくる。したがってこの例は，一方では言葉の欠陥としての「あいまいさ」を明示し，他方では後続文の接続詞が意味するところの相違によって，先行する成句が本義にも転義にもなりうるという，言葉の機能としての「適応性」を証明している。またこの例にかんしては，それが当然想起させる «ne pas remuer le petit doigt» という成句とコンテクストの一致も無視できない。すなわち，鋭い泣き声にジャックモールがうんざりしているにもかかわらず，キュブランは3人の赤ん坊の面倒をみようとしないこと，そしてこの成句が「困っていても小指ひとつ動かさない，状況を黙止して努力を怠る」という意味をもっていることである。

4．凝結した連辞への操作

個人独自の言語感覚はつねにそれが獲得される幼年期から養成されるが，ヴィアンのばあいもまた例外ではない。生まれ育ったヴィル・ダヴレーでは，隣家のジャン・ロスタンを招いて「題韻詩遊び」に興じていたという[20]。つぎにあげる2つの例はこの「題韻詩遊び」を応用したものである。ここでは連辞を構成する1語を抜き出して，それに別の語句を連鎖させている。連鎖の根拠はやはり同（類）音性であるから，意味上の関係がないふたつの言葉は既成文法では考えもしなかった突飛なイメージを産み出す。言葉そのものに記述を委

ね，ある意味では「オートマチック」ともいえるこのような言語遊戯法の多用という観点では，ヴィアンもまたシュルレアリストであるかのような側面をもっている。しかし，決定的な相違は，シュルレアリストたちが「書く」ために，外部の刺激を絶ちきって半睡半覚の意識状態に自閉したことや，集団での作業に言葉の偶然性を求めたのにたいして，ヴィアンは非常に醒めた意識のうちに先験的な言語感覚によって言葉を連ねるのである。

• «le Major, vêtu d'un complet pied de poule au riz» [VP 82] —— «pied de poule» は「千鳥格子模様」，«poule au riz» は「ボイルドチキンのライスクリーム添え」である。あえて訳せば「蒸し千鳥格子のスーツ」とでもなろうか。

• «vert d'eau très profonde» [EJ 10] ——「とても深い水色」と意味上はなにも障害はないのだが，«profond» が女性形であるから，この形容詞は «vert» ではなく «eau» にかかっている。「流れる水色」「沸騰した水色」などとはいわないのと同様に，「(水深が) 深い水色」はありえない。

つぎの数例では，連辞の内部への語句の挿入，あるいは類音（類義）語の代入がおこわれている。したがってもとになった連辞の機能はほとんど失われ，言葉は本来の意味を奪回する。

• «On dit que les filles d'Auteuil entrent chez les philosophes comme bonne à presque tout faire» [EJ 31] ——「女中 (bonne à tout faire)」に «presque» を挿入することで「(肉体関係以外なら) ほとんど何でもやってくれる女中」というような性的なニュアンスが込められている。また，「オートゥイユの娘」，「哲学者たちの家」という語句から，18 世紀の百科全書派たちが集まったエルヴェシウス夫人のサロンがほのめかされていると推測できる。快楽を至上原理に据えた感覚論的唯物論者エルヴェシウスと，才色兼備の夫人への辛辣な解釈であると考えられる。

• «quatre zazous désœuvrés qui bayaient aux cornemuses dans un coin» [VP 173] ——現在では「口をぽかんと開けて空を見る，(bayer aux corneilles)」という表現でのみもちいられる「カラス (corneille)」に類音性のある「風笛 (cornemuse)」を代入している。したがって，「ぼんやりと笛を吹いて時をすごす」といった意味になるだろうか。

• «cuir de roussette» [EJ 10] ——上質なことで有名な「ロシア革 (cuir de Russie)」を（反対に革として価値があるのか疑わしい）「トラザメ，オオコウモリ，ヨーロッパアカガエル (roussette)」に置き換えている。しかし類

音性にはかなり乏しいことから，いわゆる「ロシアン・ルーレット（roulette russe)」からの連想なのかもしれない。

• «Ils [= les frères Desmaret] étaient très souvent invités comme pédéraste d'honneur, car ils présentaient bien» [EJ 50] ——デマレ兄弟は「見てくれがいい」ので結婚式によく招待される。«garçon（d'honner»「新郎の介添え役」）と «pédéraste（d'honneur»「名誉の男色家」）のあいだには音声の類似はまったくなく，遊びの根拠は滑稽なデマレ兄弟が演じる「男色家」と「少年」の関係のみであるようだ。

• «Seul les purs, les au courant, les intimes, avaient de vraies cartes, [...]» [EJ 74] ——«être au courant de» には「通じている，事情通である」の意があり，これを「範疇転換（hypostase)」[21] している。しかし «au courant» が成句として凝結したかたちであり，分解できないひとつの統辞単位であるため[22]，不完全な複数形になっている。講演会に長蛇の列をつくる人々の中で，パルトルの哲学を純粋に支持している人，彼の親近者，そしてこの「事情通」たちだけが本物の招待状を手に入れ，「流れに乗って」たやすく入場できるのである。

5．新しい意味の付加

現在つかわれている言葉をかたちを変えずもちいて，新しい意味を付加する。ほかの語での言い換えが可能であり，文法的，語彙的には誤りであるが，この誤用が「言葉の自律性」を引き出す結果となっている。その例をいくつか挙げてみよう。

• «Je l' [= Alise] envisage en ce moment» [EJ 17] ——«envisager» にはない「顔を思い浮かべる」といった意味を付加している。«visage» から派生させたと思われるこの動詞は，それゆえに «rappeler» よりも言葉としての原始的な力を帯びている。

• «Je vais d'abord m'abluter, et me raser, et me vérifier» [EJ 28] ——«se vérifier» は本来「正しさが実証される」という意味だが，ここでは「不備はないか点検する」といった意味が付加されている。再帰代名詞に「自分のすべての外観」の意が込められ，当時の若者の奇抜な容貌を象徴する主人公コランの服装への徹底した美意識を強調している。また，«abluter» はやや宗教的な含意で「みそぎ，洗浄」をさす «ablute» を動詞化したもので，ここでは「顔を洗う」ぐらいの軽い意味でつかわれている。

• «Isis, en dix-huit ans d'âge, était parvenue à se munir de cheveux châtains, d'un sweat-shirt blanc et d'une jupe jaune avec un foulard vert acide [...]» [EJ 22] ——«se munir» は「携行する，身につける」といった意味で，もともと体の一部である髪の毛につかうのはあきらかにまちがいである。しかしこの誤用が，女にとっては髪も装飾品であるかのような風刺を産み出している。このようにそれぞれ違った意味分類に属する複数の項を従属語としてひとつの主部につなぐことは「いつわりの等位関係」[23] であり，言語の一貫性を破壊する。

6．造語

ヴィアンの小説を読みにくくしている最大の原因が横溢する造語であろう。しかしそれらはこの世には存在しないモノや，見たことのない風景，われわれが経験できない奇跡を現出させもする。見知らぬひとつの言葉によって世界は現実から幻想へと移行することが可能であり，ヴィアンの作品に生々しい幻想性を与えているのもこの造語機能ではないだろうか。

6．1．ふたつの語の結合

• «pianocktail» [EJ 14] —— コランが発明した自動機械で，鍵盤を叩くと曲にあったカクテルができあがる。文字どおりピアノとカクテルを組み合わせたものだが，これはルイス・キャロルが提唱したいわゆる「かばん語（mot-valise)」であり，2つの語が両開きの鞄のように閉じ合わさってできている。以下の例も同様な生成過程をもつ。

• «trumeaux» [AC 18] ——«tri-» と «jumeau» が結合したもので，単純に「3つ子（triplé)」といわないのは，最後のひとりだけがあきらかにあとからでてきて，強い個性と父親を釘で刺す反抗心をもっているからである。3人をとりあげたとき，ジャックモールも «des jumeaux et un isolé» とつぶやく。

• «députodrome» [EJ 42] ——「国民議会議員（député)」と「競走（-drome)」が結合したものと思われる。コランはクロエとの逢瀬にこの滑稽な競技を見に行こうとする。

• «les enfants de Foi venait par couples, en s'amignotant tout au long de l'escalier» [EJ 60] ——«enfant de chœur（聖歌隊の少年)» と «homme de foi（忠実な臣下)» を組みあわせて «enfant de Foi», «ami» と «mignoter» を組みあわせて «s'amignoter（お互い仲良く甘えあう)» といった意味に

なるだろうか。

• «octavon» [EJ 107] ——«octa–» と «quarteron»「黒人の血が4分の1の混血」をあわせて「8分の1の黒人混血児」を意味している。前述の «troizocloque» や «trumeau» と同じく，ごく自然な語感をもった言葉ではないだろうか。

6．2．武器，殺人機械

• «égalisateur à douze giclées» [EJ 155] ——「12連発の平等銃」は「お奉行」に率いられた「武装官憲」の武器である。この言葉の裏側には，「死体＝モノ」になってはじめて人間は平等になれるというヴィアンの根本的な思想がある。

• «lance–mort de divers calibres» [EJ 144] ——«calibre» が「(大砲などの) 口径」をさし，壁に架けて収集されていることから，やや小型の円筒形の銃砲で，切り刻んだ死体の一部を銃弾がわりに射つ武器だと思われる。

• «arrache–cœur»「心臓抜き」，«tue–fliques»「警官殺し」[EJ 162] ——シックが警察に踏み込まれたときに部屋で発見された武器であるが，『日々の泡』に登場するパルトルの信奉者（実存主義者）たちはたいてい皆携えているのかもしれない。アリーズはこの「心臓抜き」でパルトルの4面体の心臓をつかみ出す。«lance–mort»，«arrache–coeur»，«tue–flique» はどれも「動詞の直説法現在3人称単数の凝結形＋連結線（－）＋直接目的補語となる名詞」という合成語の典型的な型式をとっており，合成されている動詞と名詞を知っていれば解読は容易である。ヴィアンはごく自然に，«cache–nez» や «porte–monnaie» と同じ次元でこれらの言葉をつかっている。

6．3．音声的なもの

• «Quelques bestioles zozonnaient...» [EJ 71] ——miauler という動詞が猫の鳴き声から派生したのと同じように，「まぬけ（zozo)」，「おかしな発音（zozoter)」から «zozonner» は「奇妙な音を出して飛び回る」というような意味だろう。

• «maréchaler/ferranter» [AC 131/132] ——「蹄鉄工（maréchal–ferrant)」から発生した言葉で，「蹄鉄工は蹄鉄工らしくいった」という過去の意味において «maréchala le ferrant» あるいは «ferranta le maréchal» ともちいられる。

・«Le chemin gémissait sous les pieds de Jacquemort. Chuintait. Gouillait. Résouillait. Gluissait» [AC 156] ——ここでつかわれている動詞のうち，はじめの2語«gémisser»，«chuinter»は現行のもので道があえぎ，うめくという不気味な虚構を描き，あとの造語は逆に理に適ったもっともな表現である。「ジャックモールの足元で道はうめいていた。しゅうしゅういっていた。ぬかるみ，汚れ，ねばねばしていた」。足元にえんえんとつづく田舎道のぬかるみを描写するために，ヴィアンはきわめて適切な言葉をつくりだしている。«gouiller»，«résouiller»，«gluisser»という造語が読者にもたらすイメージは，«gémisser»，«chuinter»という現行の動詞のそれよりもリアルであり，これらの造語がいずれ辞書に組み入れられても不思議ではないだろう。この例によって，われわれはすべての言葉が誰かに産み出された造語であることを思いだすのである。

Ⅲ．パタフィジシャンとしてのヴィアン

クノー，プレヴェールらをつうじて，ヴィアンがその設立時から接触があった＜コレージュ・ド・パタフィジック＞に「第1級の屠殺人」という資格で正式に加わったのは，最後の小説『心臓抜き』刊行の前年にあたる1952年である。一主義，一組織を嫌い，アンガージュマンを一笑に付したヴィアンがコレージュに参加した理由は，もちろんこのパタフィジックという科学の創始者，アルフレッド・ジャリへの敬愛もあるが[24]，なによりもこのコレージュがもつ遊びの精神にあったのではないかといわれている。『フォーストロール博士言行録』の訳者，相磯佳正は，「大陛下」・「監督官」・「太守」・「請願第二庶務係補佐官」といった大時代的な位階名と，ジャリの生まれた1873年9月8日を紀元元年元日とするパタフィジック暦などの秘密結社的な雰囲気をヴィアンは好んだのではないかと推測している[25]。

このような遊びの精神と真摯な態度が混然一体となったコレージュの性格は，当然そこに連名した作家たちの作品と共鳴する。たとえば，レーモン・クノーについて，モーリス・ナドーは「日常生活のうちにあってユーモアを感じさせる嘲弄的な諸相への好み」[26]を指摘している。つまりクノーは，存在と時間，老齢と死といった哲学的問題をあつかいながらも，作品の舞台としては田舎の祭りや，すすけた名もない郊外を，登場人物としては単純で無名の庶民を選ぶのである。『はまむぎ』はデカルトの『方法序説』をモデルにして書かれ，

『人生の日曜日』はヘーゲルの刻銘を，『青い花』はプラトンの一語を，『イカロスの飛行』はオヴィディウスの一詩句をもとにしていながら，人生をありのままにとらえる，一種ポピュリスム小説に似た子供っぽい外観をもっている。

ここからもパタフィジシャンたちに共通する方法論があきらかになってくるのである。つまり，哲学的な主題をありふれた日常に投企し，もっとも神聖な問いにもっとも卑俗な文体で答え，言語の実践から遠く離れた「書き言葉」を通俗的な「話し言葉」に置き換えるのである。作者が表現したいことに照応できる唯一の語を創造するために，統辞法をばらばらに分解し，発音するままに語を表記しようと試みる。

コレージュに参加したクノー，ミシェル・レリス，レーモン・ルーセルといったメンバーの「真面目／不真面目」，「悲劇／喜劇」，「現実／非現実」といった二元的な区別を排除しようとする共通の態度，これがまさにパタフィジックという科学をもっとも端的に象徴している。そしてヴィアンもまた，本能的な言語感覚にしたがってこのような反抗的態度を実践する生まれながらのパタフィジシャンなのである。

パタフィジックという科学について，その提唱者であるアルフレッド・ジャリは，1898年に執筆の『フォーストロール博士言行録』のなかで，つぎのような定義をおこなっている。

パタフィジック——その語源は''επι（μετὰ τὰ φυσικὰ）と記されるに相違なく，安易な語呂合せを避けるために[27]正しくはアポストロフを先立てて，'pataphysique と綴られる——とは，形而上学そのものの内であれ外であれ，形而上学に付帯するものの科学であり，形而上学が自然学の先へ展開しているのと同じだけ形而上学の先へ展開しているのである。

そして，副現象はしばしば偶発的なものであるから，パタフィジックは，普通の科学のみが科学であるといわれていようとも，とりわけ個の科学となろう。パタフィジックは，例外を支配する諸法則を究め，この世界を補足する世界を解明せんとするものである。あるいは，より控えめにいえば，伝統的な世界に代ってひとが目にしうる，そしておそらく目にしているはずの世界を記述することになろう。発見したと思いこんでいる伝統的世界の諸法則も頻度こそ高いとはいえ，結局は例外の相関関係であり，いずれにせよ，ほとんど例外的ならぬ例外に成り果てて，特異性という魅力にすら欠ける偶発的事象の相関関係にすぎないからである。

定義——パタフィジックとは，潜在性によって記述された対象の諸特性を象徴的に輪郭に帰する，想像力による解決の科学である。[28]

ジャリという人物を考えるとき，難解な作品のみならずその伝説的な逸話や偏向を象徴するある図形が想いうかぶ。それは「円」と，ユビュの腹の上に描かれた「螺旋」である。ミシェル・レリスが『闘牛鑑』の冒頭で引用した「神は零と無限大の接点である」というジャリの言葉に集約されるように，パタフィジックは無限に延びる直線を円環として閉じようと試みる。つまり，２つの相反する方向性をもつものの極限を同一視しようとする科学であるといえる。ここから前述のように「正と負に代表される二元的なものの区別の拒否」が生まれるのである。

また，相磯佳正はつぎのような注目すべき指摘をしている――

> パタフィジックとは外的世界にたいして主体がなす認識行為の恣意性と偶有性の自覚である。この自覚をもとに，ジャリは≪中心に向かう物体の落下≫を描くかわりに，≪周囲に向かう虚構の上昇≫を描こうとする。いわば，ジャリにとって書くという行為の結果たる文学作品とは≪非現実≫にほかならないのであり，この≪非現実≫の意識的提示をとおして外的世界にたいする主体の営為の≪非在≫を感知せしむる以外に文学は意味をもたぬのである。〔…〕
> 科学知識に想像力を加えて作り出された「幽霊」〔…〕，意図的に虚構性を強調したとしても，読者の営為のなかで，それは無意識的虚構たるレアリスム作品と同じ平面におかれるにいたる。≪現実≫／≪非現実≫の区別が生まれはじめ，「幽霊」は次第に濃度を増して，肉体すら持ちはじめる。したがって，読者を常に≪非在≫に宙づりにして，不快感と恐怖を絶えずかきたてるためには，彼らがまるで安定した支柱とでも考えているような言語を揺り動かし，言語の本質的非在性を暴きだし，言語にたいする先験的な信頼を突き崩す必要が生じる。かくして，パタフィジックの視点に立つかぎり，作者は言語空間の徹底的探検に踏み出さざるをえない。[29]

われわれはヴィアンの言葉遊びから，言葉の隠された特性を指摘することができる。それは言葉の自律性であり，適応性であり，自己増殖の機能である。また，ヴィアンは言葉の原始的な力を復権させたといえる。そしてその力を音声のレベルで衝突させ，人間が言葉に与えつづけてきたあいまいさを剝ぎ取って，言葉そのものを露呈させた。足元をすくわれて宙づりになったそのあいまいさをヴィアンは悪意を込めて笑い飛ばす。ヴィアンにとって小説を書くという行為は，言葉のちからに記述をゆだね，自分をモノと化する，ある意味で降神術のようなものでさえあったのではないだろうか。

モノにたいする嫌悪を隠さないヴィアンだが，嫌悪という感情はしばしば自分より強大なものへ向けられるように，ヴィアンの描く世界では，それゆえ言

葉は横行し，無生物は活気に溢れ，それにたいして人間だけが毎日少しづつ死んでいく。モノの優越性は，人間のみならず，すべての生命ある存在が最終的な到達点としてもっている「死」からも，解放されているということである。心臓病におかされ，自分の不規則な鼓動を確かめながら，いつも死を明確に意識せざるをえなかったヴィアンにとって，つねに決然としてそこに在る「モノ」は，恐怖すべきものであると同時に理想のかたちでもあったのである。「死」という到達点を理不尽に設定され，その代償として受けもった人生の意味という実体のない足枷を引きずって，人間はただ途方に暮れている。モノが理想的なかたちであるというのは，この「意味」をも免れている点においてである。クノーをして，「現代においてもっとも悲痛な恋愛小説」[30] といわしめた『日々の泡』の作家は，過剰なまでの言語操作によって「不真面目さ」をきわめようと試みた作家でもある。『心臓抜き』の生々しい幻想世界は，ヴィアンのつくりだすひとつの言葉でわれわれの現実とつながっており，それは虚構性を増せば増すほど現実味をおびる。不確実でよりどころのない人間は，モノと化してはじめて存在を認められる。言葉遊びを駆使して，ヴィアンは文学にたいする両極的な態度——パタフィジックにおいてこのような二元論は意味をもたないが——を表明しようとしたといえるのではないだろうか。

本稿ではヴィアンの言語感覚について，言葉遊びとパタフィジックという観点からの検討を試みたが，すべての鍵となるべきは，「ぼくの求めているのはみんなが幸せになることじゃないんだ。おのおの各人が幸福になることだ」[31] というような，ヴィアンのパラドクスの裏にあってときおり顔をのぞかせる，隠された真のすがたであろう。モノを賛美し，モノ化を拒否し，自分の美意識とダンディスムに絶対の価値を与えつづけたヴィアンの超個人主義については，つぎの機会に論をゆずりたい。

註

1）ヴィアンのテクストとして引用したものは以下の版により，また引用文の末尾［ ］内に各略号とページを示す。邦文引用は拙訳による。
ＶＰ：*Vercoquin et le plancton,* Paris: Christian Bourgois, 1981.
ＥＪ：*L'Écume des jours,* Paris: J.-J. Pauvert, coll. «10 / 18», 1987.
ＡＣ：*L'Arrache-cœur,* Paris: J.-J. Pauvert, 1986.
2）「徳利明神」の詩が収められているのは 1565 年版のみであり，この版においてはじ

めてパニュルジュの祈り歌は徳利の形で印刷され，巻末に折り込まれている。手稿では徳利の輪郭いっぱいにかかれた文字が印刷時には左半分に寄せられているため，詩句の部分がまるで立体の影のように見え，より一層絵画的な効果をだしている（voir François RABELAIS, *Œuvres complètes*, Paris: Éd. du Seuil, 1973, p. 782)。

3）Voir Marcel JEAN, *Autobiographie du surréalisme*, Paris: Éd. du Seuil, 1978, pp. 235－237.

4）ピエール・ギロー『言葉遊び』(中村栄子訳)，白水社「クセジュ文庫」，1979年参照。

5）Boris VIAN, «Avant-propos» de *L'Écume des jours*, op. cit., p. 7.

6）その方法には，特定の文字を一度も用いずに書く「リポグラム（lipogramme)」，あるテクストを取りあげて，その各語を辞書の中でその語から7番目に位置する語で置き換える「S＋7方式（méthode S＋7)」，1編の詩を土台にして，これと同じ音素あるいは同じ文法構造をつかってもうひとつ別の詩をつくる「同形文（textes isomorphes)」，任意の組み合わせの偶然性がテクストをつくる「行列（matrice)」などがある。Oulipo, *La Littrature potentielle*, Paris: Gallimard, 1973, および酒詰治男「「人生，使用法」の四つの図形」(『甲南女子大学ヨーロッパ文学研究』第10号，1986年，87－100頁)，「「失踪」あるいは盗まれた文字」(同13号，1989年，47－66頁）などを参照。

7）Voir Jacques DUCHATEAU, «Attention, romans piégés», *Magazine littéraire*, n° 182, mars 1982, pp. 30－32.

8）ヴィアンの言語操作を論じたもののなかで，本稿は特につぎの3編を参考にした：Jacques BENS, «Un langage-univers», postface de *L'Écume des jours*, op. cit., pp. 177－187; Michel GAUTIER, *L'Écume des jours*, coll. «Profil d'une œuvre», Paris: Hatier, 1973; Marc LAPPRAND, «*Vercoquin et le plancton* comme prétexte de *L'Écume des jours*», in *Écriture-réécriture*, Toronto: Les Éditions Trintexte, Trinity College, 1988, pp. 249－266.

9）アンリ・ミッテラン『フランス語の語彙』(内海利朗・神沢栄三訳)，白水社「クセジュ文庫」，1984年，84頁。

10）なお，このような音声表記はレーモン・クノーのテクストに頻繁にみられる。たとえば，『地下鉄のザジ』(Raymond QUENEAU, *Zazie dans le métro*, Paris: Gallimard, 1972) では，«Ils ont des blue-jeans» を «Izont des bloudjinnzes» (p. 47)，あるいは «on revend des Rembrandt à un amerlot» を «on les [= des ranbrans] revend à un Amerlo» (p. 46) と綴り，『きびしい冬』(*Un rude hiver*, Paris: Gallimard, 1978) では «*Zey lâffe*, dit Lehameau, *bicose zey are stioupide.*» (p. 9) と表記する。また，『文体練習』(*Exercices de style*, Paris: Gallimard, 1982) では «un jour vers midi j'ai pris l'autobus pour la porte Champerret» を «ung joor vare meedee ger pree lotobüs poor la port Changparay» (p. 129) と書き換えている。

11）ギロー前掲書，32－35頁参照。

12）Voir Gilbert PESTUREAU, *Dictionnaire Vian*, Paris: Christian Bourgois, 1985, pp. 329－330.

13）Gustave FLAUBERT, *Dictionnaire des idées reçus*, Paris: Nizet, 1966, pp. 143－

144. 筑摩書房『フローベール全集』第5巻,『紋切型辞典』(山田爵訳), 1966年, 306頁。

14) Voir Noël ARNAUD, «Notice biographique de Vian», *Obliques,* n° 8-9, 1981, p. 229.

15) ギロー前掲書, 35頁。

16) Noël ARNAUD, *Les Vies paralèlles de Boris Vian,* Paris: Christian Bourgois, 1981, p. 18.

17) たとえばヴィアンは自作自演のシャンソン『脱走兵』が発禁処分を受けたとき, ディナール市長からカジノへの出入り禁止を通告されたことについて激しい抗議文を送り (voir «Le Déserteur», *Obliques*, n° précité, p. 74), 在郷軍人会とも公開書簡で論争を引き起こしている (voir Boris VIAN, *Textes et chansons,* Paris: Christian Bourgois, 1985, pp. 173-182)。

18) ジャックモールが女中たちとの関係にうんざりしているのは事実だが, «laisser aller le chat au fromage» という成句が「女が誘惑に負けて貞操を守らない」ことを指しているように,「猫」は特に「女のセックス」という比喩的意味をもっている。この意味は16世紀以来極端に広まり, 現在では猫を指すあらゆる語 (minette, mitouard, moniche, chagatte など) の背後に見いだせるのである (ピエール・ギロー『フランス語の成句』[窪川英水・三宅徳嘉訳], 白水社「クセジュ文庫」, 1984年, 109-110頁参照)。

19) ヴィアンは1948年にパヴィヨン・ド・マルサンでおこなわれた「モノへの慎重な接近」と題した講演でも, この言いまわしをつかっている:«Je veux approcher l'objet comme on fait un pigeon, lui mettre un grain de sel sur la queue et le narguer ensuite [...] » (cité par Jean CLOUZET, *Boris Vian,* Paris: Éd. Seghers, coll. «Poètes d'aujourd'hui», 1966, pp. 149-166).

20) ジャン・ロスタンは『シラノ・ド・ベルジュラック』の作者エドモン・ロスタンの次男で, ヴィアンが最初に公表する『ヴェルコカンとプランクトン』はこの隣人の紹介でレーモン・クノーの手にわたり, ガリマール書店からジャン・ロスタンへの献辞を付して出版された。なお,「題韻詩遊び」については, ギロー『言葉遊び』, 62-63頁を参照。

21)「範疇転換」は形容詞を名詞に転用するなど文法上の機能を変えることだが, 動詞 «boire» が形を変えずに名詞 «le boire» として用いられるときなど, 普遍化した場合には「偽派生 (dérivation impropre)」となる。

22) 成句は (名詞に冠詞をつけないなど) 言語の正規の慣用から逸脱した特殊な言葉の用法であって, 凝結した形でしかその意味と同一性を保たない (ギロー『フランス語の成句』, 7-8頁参照)。

23) しかしこのような統辞法上の不統一は, 意識的に, かつ, 優れた技巧をもちあわせているときには「繋駕法 (attelage)」として文章に独創性と美を賦与する (ギロー『言葉遊び』, 47-48頁参照)。

24) ヴィアンは自分が好んだ文学作品として, ジャリの『フォーストロール博士言行録』のほかに, クノーの『きびしい冬』, コンスタンの『アドルフ』, カフカの『流刑地にて (*In der Strafkolonie*)』, フォークナーの『標識塔 (*Pylon*)』をあげている (voir Jacques BENS, «Cinq livres pères», *Obliques,* n° précité, pp. 145-147)。

25) 相磯佳正「パタフィジシャンとしてのボリス・ヴィアン」,『海』第11号, 中央公論社, 1970年, 206－212頁。
26) モーリス・ナドー『現代フランス小説史』(篠田浩一郎訳), みすず書房, 1966年, 71－75頁参照。
27) ここでいう「安易な語呂合わせ」とは, 訳者も指摘しているように,「パタフィジック」という語がつくり出す «patte à physique»「フィジックに生えた足」すなわち「フィジックの付け足し」というような地口である。またおなじように «pas ta physique» ということもできるし, そもそもジャリ自身が «bat' (= batton) à physique»(「形而下棒」) という地口や, «pantaphysique»(「汎フィジック」) という造語をこの書物の中でつかっているのである。
28) アルフレッド・ジャリ『フォーストロール博士言行録』(相磯佳正訳), 国書刊行会, 1985年, 43－44頁。なお, 原文は次のとおり――

«La pataphysique, dont l'étymologie doit s'écrire *''επι (μετὰ τὰ φυσικὰ)* et l'orthographe réelle *'pataphysique,* précédé d'un apostrophe, afin d'éviter un facile calembour, est la science de ce qui se surajoute à la métaphysique, soit en elle-même, soit hors d'elle-même, s'étendant aussi loin au-delà de celle-ci que celle-ci au-delà de la physique. Ex.: l'épiphénomène étant souvent l'accident, la pataphysique sera surtout la science du particulier, quoiqu'on dise qu'il n'y a de science que du général. Elle étudiera les lois qui réggisent les exceptions et expliquera l'univers supplémentaire à celui-ci; ou moins ambitieusement décrira un univers que l'on peut voir et que peut-être l'on doit voir à la place du traditionnel, les lois que l'on a cru découvrir de l'univers traditionnel étant des corrélations d'exceptions aussi, quoique plus fréquentes, en tout cas de faits accidentels qui, se réduissant à des exceptions peu exceptionnelles, n'ont même pas l'attrait de la singularité.

DÉFINITION : *La pataphysique est la science des solutions imaginaires, qui accorde symboliquement aux linéaments les propriétés des objets décrits par leur virtualité*». (Alfred JARRY, *Gestes et opinions du docteur Faustroll, pataphysicien,* in *Œuvres complètes,* t. I [1972], Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», pp. 668－669).

29) 相磯前掲論文, 209－210頁。
30) Raymond QUENEAU, «Avant-propos» de *L'Arrache-cœur,* op. cit., p. 6 : «Boris Vian a écrit de beaux livres, étranges et pathétiques, *l'Écume des Jours, le plus poignant des romans d'amour contemporains*... ».
31) Boris VIAN, *L'Écume des jours* op. cit., p. 48 : «Ce qui m'intéresse, ce n'est pas le bonheur de tous les hommes, c'est celui de chacun».